

## 第 16 回 東京都公立幼稚園・こども園 5 歳児の運動能力に関する調査

### 目 次

第 1	調査の背景及びねらい	
1	調査の背景	56
2	調査のねらい	56
第 2	調査の内容及び方法	
1	調査の内容	56
2	調査の方法	56
第 3	調査の結果	
1	調査の結果の前回比較	57
2	調査の結果における有意差検定の結果	58
3	今回の調査における運動能力の傾向	59
4	各種目別調査の結果及び分析	59
第 4	幼児の遊びに関する調査の結果及び分析	
1	幼児の遊びに関する調査の結果	67
2	保護者への情報発信や保護者参加型の活動	71
第 5	調査のまとめ及び今後に向けて	
1	調査のまとめ	72
2	今後に向けて	73

#### 1 調査の成果

- 東京都公立幼稚園・こども園における 5 歳児の運動能力の傾向を示したこと。
- 幼児の運動に関する各園の保護者への情報発信の取組や、保護者参加型の活動等についての傾向を示したこと。

#### 2 調査の活用

- 5 歳児の運動能力の実態を基にして、各園において具体的な指導方法や環境づくり等、保育の改善に活用できる。
- 各園の保護者への情報発信や保護者参加型の活動等についての工夫・改善に活用できる。

## 第 1 調査の背景及びねらい

### 1 調査の背景

昭和 50 年代前半、都市化の影響から運動能力の発達が十分でなかったり、遊びに意欲的に取り組めなかったりする幼児の増加が問題視されるようになった。そこで、東京都教育委員会では、幼児教育を推進する上で、幼児の運動能力の実態を捉えることが重要であると考え、昭和 55 年度より 3 年ごとに東京都公立幼稚園・こども園に在園する 5 歳児を対象に運動能力調査を実施してきた。

前回の令和 4 年度の調査研究では、従来の運動能力調査の結果に加え、幼児が遊びや生活の中で多様な動きを獲得していく実態を把握することを目的として、運動能力の上位群と下位群に属する「幼児の動き」を調査した。両群を対象としたのは、運動特性を比較し、発達の段階に応じた指導法や環境構成の基礎資料を得るためであり、幼児の動きの傾向をより包括的に捉えることを意図したためである。さらに、同年度からは、調査対象幼児の「日常生活における動作」の傾向を把握し、要因を検討する調査も開始するとともに、幼児の動き及び日常生活における動作に関する調査結果と各園の取組を関連付けながら分析し、その一部を紹介した。幼児の動きと日常生活における動作の調査は、本調査においても継続している。加えて、本調査からは、幼児の運動に関して保護者にどのような内容及び手段で情報を発信しているかについての調査を新たに追加し、実施した。

### 2 調査のねらい

本調査のねらいは、幼児の運動に関する実態を多面的に把握し、発達の段階に応じた指導や環境づくりに役立つ基礎資料を得ること及び運動に関する各園と家庭との連携を促進するための知見を得ることである。

## 第 2 調査の内容及び方法

### 1 調査の内容

#### (1) 運動能力調査

##### ア 25m走(主として敏捷性、瞬発力)

30mの直走路を走り、スタートから 25mの地点を通過したときの時間を測定する。

##### イ 立ち幅跳び(主として瞬発力)

両足同時に踏み切って跳び、踏み切り線と着地した地点との最短距離を測定する。

##### ウ ソフトボール投げ(主として瞬発力、調整力)

助走を行わずにボールを投げ、投球するラインと落下地点との距離を測定する。

##### エ 体支持持続時間(主として筋力、持久力)

2つの巧技台の間に立ち、両腕で体を浮かし、体を支えられる時間を測定する。

##### オ 両足連続跳び越し(主として調整力、敏捷性)

4 m50 cmの間に置かれた 10 個の積み木を両足で同時に跳ぶ時間を測定する。

#### (2) 幼児の遊び及び各園の取組に関する調査

各園が工夫して取り組んでいる、幼児が体を動かすことを楽しむための遊び、幼児の日常生活における動作や身のこなしに関する課題及び幼児の動きの傾向についてのアンケート調査を実施した。

## 2 調査の方法

### (1) 対象園

都内公立幼稚園・こども園 79 園

(2) 調査対象

ア 調査対象園（79 園）に在籍する 5 歳児 1,494 人（男児 765 人、女児 729 人）

都内全公立幼稚園・こども園に在籍する 5 歳児の 58.9%に該当（文部科学省「令和 7 年度学校基本調査」令和 7 年 12 月）

イ 調査対象園（79 園）の 5 歳児クラスの幼稚園教諭及び保育教諭（以下「教諭」という。）のうち回答への協力を得られた 68 人

(3) 調査期間

令和 7 年 9 月から 11 月までの間で連続する 2 週間

第 3 調査の結果

1 調査の結果の前回比較

前回（令和 4 年度）及び今回（令和 7 年度）の調査結果について、男女別及び年齢区分別の平均値をまとめると、以下のとおりである（表 1、表 2 及び表 3）。

表 1 前回及び今回の調査結果（全体平均・男女別）

年度	種目 性別		25m走（秒）		立ち幅跳び（cm）		ソフトボール投げ（m）		体支持持続時間（秒）		両足連続跳び越し（秒）	
	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
令和 4 年度	6.4	6.6	104.7	97.9	5.7	4.2	39.4	38.4	6.2	6.3		
令和 7 年度	6.5	6.5	104.0	98.5	5.6	4.1	37.3	37.3	5.9	5.8		
前回比	▲0.1	0.1	▲0.7	0.6	▲0.1	▲0.1	▲2.1	▲1.1	0.3	0.5		

表 2 前回及び今回の調査結果（年齢区分 A・男女別）

年度	種目 性別		25m走（秒）		立ち幅跳び（cm）		ソフトボール投げ（m）		体支持持続時間（秒）		両足連続跳び越し（秒）	
	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
令和 4 年度	6.6	6.7	99.6	95.2	5.2	4.0	36.7	33.6	6.3	6.5		
令和 7 年度	6.7	6.6	99.1	93.2	5.1	3.8	34.8	33.1	6.1	6.1		
前回比	▲0.1	0.1	▲0.5	▲2.0	▲0.1	▲0.2	▲1.9	▲0.5	0.2	0.4		

表 3 前回及び今回の調査結果（年齢区分 B・男女別）

年度	種目 性別		25m走（秒）		立ち幅跳び（cm）		ソフトボール投げ（m）		体支持持続時間（秒）		両足連続跳び越し（秒）	
	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
令和 4 年度	6.3	6.5	109.4	100.1	6.1	4.4	41.9	42.3	6.1	6.1		
令和 7 年度	6.3	6.4	107.9	101.8	6.0	4.4	39.2	40.0	5.6	5.6		
前回比	0	0.1	▲1.5	1.7	▲0.1	0	▲2.7	▲2.3	0.5	0.5		

**《年齢区分》**

この調査では、調査実施時における幼児の年齢を、以下のように 2 点に分けている。

- ・年齢区分 A（5 歳 0 か月から 5 歳 11 か月まで）
- ・年齢区分 B（6 歳 0 か月から 6 歳 11 か月まで）

**《データ集計》**

この調査では、測定値の平均値を小数第 1 位までの概数で表している。未測定の数値については、除外して集計している。表 1、表 2 及び表 3 の「前回比」において、▲印のついた数値は、前回と比べて記録が低下したものを表している。

**2 調査の結果における有意差検定の結果**

前回と今回の調査における有意差、今回の調査における男女間及び年齢区分間における有意差について両側検定の Welch の t 検定を行った。結果は以下のとおりである（表 4 及び表 5）。

表 4 前回と今回の調査における有意差

比較した項目		種目	25m走	立ち幅跳び	ソフト ボール投げ	体支持 持続時間	両足連続 跳び越し
年齢区分	A	男児	×	×	×	×	×
		女児	×	×	○	×	×
	B	男児	×	×	×	×	◎
		女児	×	×	×	×	◎
男児全体			×	×	×	×	◎
女児全体			×	×	×	×	◎

表 5 今回の男女間及び年齢区分間における有意差

比較した項目		種目	25m走	立ち幅跳び	ソフト ボール投げ	体支持 持続時間	両足連続 跳び越し
男児・女児間 ※1			×	◎	◎	×	×
年齢区分Aの男女間			×	◎	◎	×	×
年齢区分Bの男女間			×	◎	◎	×	×
男児の年齢区分AB間			◎	◎	◎	×	○
女児の年齢区分AB間			◎	◎	◎	◎	◎

**《有意差検定とは》**

有意差とは、確かに差があり、偶然起こったものではないと言えるかどうかを検討した結果の差のことである。

この調査では、サンプル数、平均値、平均値の標準偏差から有意差検定を行っている。

有意差検定結果は、比較をした数値間に偶然とは言えない差があるかどうかを記号で示している。

※1 例えば、今回の男女間における有意差（表 5・1 段目）について、「立ち幅跳び」及び「ソフトボール投げ」では「99%の確率で偶然とは考えにくい差がある。」となり、「25m走」、「体支持持続時間」及び「両足連続跳び越し」では「今回のサンプル数においては、95%の確率で偶然とは考えにくい差があるとは考えられない。」となる。

**《有意差の見方》**

- ・◎印…「有意水準 1 %で、有意差あり」
- ・○印…「有意水準 5 %で、有意差あり」
- ・×印…「有意差なし」

### 3 今回の調査における運動能力の傾向

前回と今回の調査について比較した結果（表 1、表 2 及び表 3）、全体平均では、女児の「25m走」、女児の「立ち幅跳び」及び男女の「両足連続跳び越し」以外の種目が低下傾向を示した。全体平均では、男児の「25m走」、男児の「立ち幅跳び」、男女の「ソフトボール投げ」及び男女の「体支持持続時間」が過去の調査の中で最も低い数値結果となった。また、有意差検定の結果（表 4）と併せると、男女共に「両足連続跳び越し」の種目に有意差が認められた。年齢区分 A の女児の「ソフトボール投げ」に関しては、5%の有意水準で前回の調査結果から有意差があることが認められた。

今回の男女間及び年齢区分間における有意差検定の結果（表 5）、時間を記録としない種目である「立ち幅跳び」及び「ソフトボール投げ」において、男児・女児間で有意差があることが認められた。また、男女それぞれの年齢区分 A B 間では、男児の「体支持持続時間」以外で有意差が認められ（表 5）、年齢が上がるにつれて記録が上昇する状況が見られた（表 2 及び表 3）。

### 4 各種目別調査の結果及び分析

#### (1) 身長

##### ア 調査結果

表 6 身長の調査結果

年齢 性別	年齢区分 A (5 歳 0 か月～5 歳 11 か月)					年齢区分 B (6 歳 0 か月～6 歳 11 か月)					全体		
	平均 (cm)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	平均 (cm)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	平均 (cm)	標準 偏差	変動 係数
男 児	111.7	4.9	4.4	131.2	96.0	115.0	4.7	4.0	128.0	101.1	113.5	5.0	4.4
女 児	111.2	4.6	4.2	129.9	99.0	114.0	4.8	4.2	127.9	96.5	112.9	4.9	4.3

#### 《変動係数》

変動係数とは、平均値に対する標準偏差の割合を表すもので、相対的な散らばりを表す指標である。標準偏差は測定単位の影響を受けるので単位の異なる資料の比較ができないが、変動係数は単位が異なる資料の散らばりの度合いを相互に比較できる。この値が大きいくほど、平均値の周りにおける資料の散らばりの度合いが大きい。

#### イ 全体平均値の推移

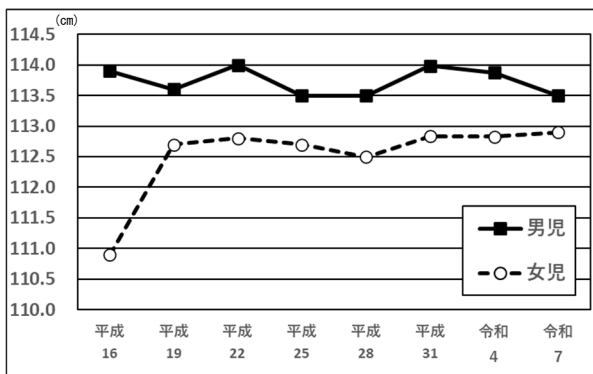


図 1 身長の全体平均値の推移

#### ウ 年齢区分間の比較

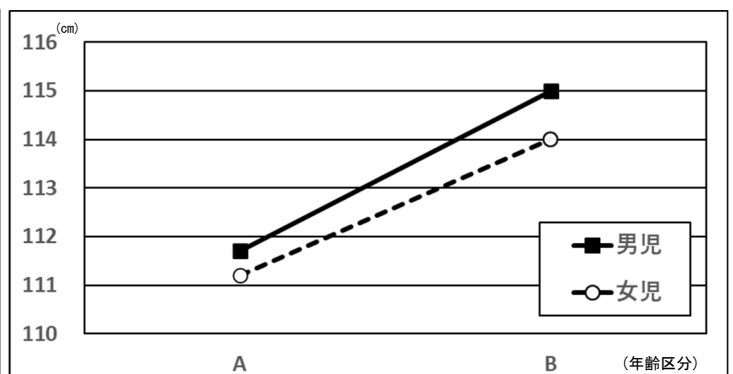


図 2 身長の年齢区分間の比較 (今回)

#### エ 身長傾向分析

全体平均値の推移は、平成 16 年度の調査を除き、平成 19 年度の調査から今回調査まで男女共に 0.5 cm の範囲内で推移している。また、男児と女児との差は、平成 16 年度の調査を除き、約 1 cm 程度で推移している（図 1）。今回の調査で、その差は 0.6 cm であった（表 6）。

年齢区分間の比較では、年齢区分 A と年齢区分 B との差は、男児が 3.3 cm、女児が 2.8 cm であった（表 6）。男児と女児の変化の割合は、ほぼ同じであった（図 2）。

(2) 体重

ア 調査結果

表 7 体重の調査結果

性別	年齢 項目	年齢区分A (5歳0か月～5歳11か月)					年齢区分B (6歳0か月～6歳11か月)					全体		
		平均 (kg)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (kg)	最低値 (kg)	平均 (kg)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (kg)	最低値 (kg)	平均 (kg)	標準 偏差	変動 係数
男 児		19.4	3.3	16.9	41.4	13.7	20.3	2.8	13.8	37.4	14.9	19.9	3.1	15.3
女 児		18.9	2.8	14.7	39.9	14.1	19.9	2.9	14.4	32.8	12.0	19.5	2.9	14.7

イ 全体平均値の推移

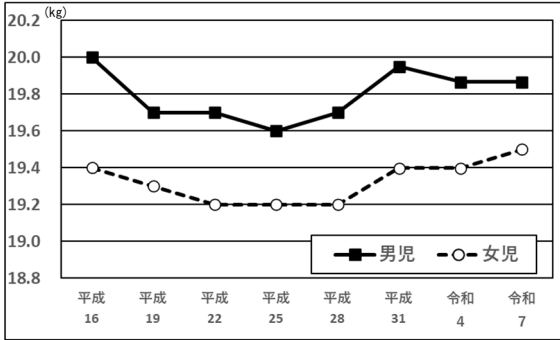


図 3 体重の全体平均値の推移

ウ 年齢区分間の比較

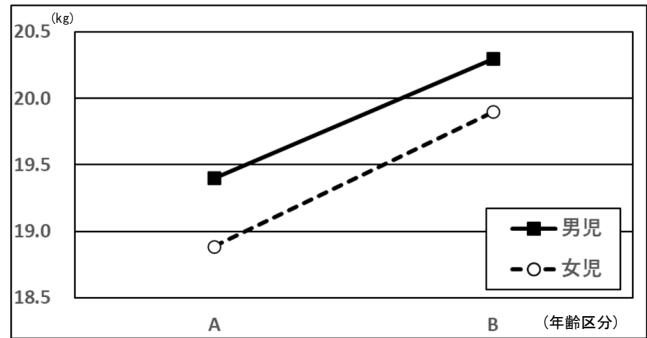


図 4 体重の年齢区分間の比較 (今回)

エ 体重の傾向分析

全体平均値の推移では、男児は平成 16 年度の調査から平成 25 年度の調査まで減少したが、その後上昇し、19 kg 後半で推移している。女児は平成 16 年度の調査から平成 28 年度の調査までほぼ横ばいであったが、その後、平成 31 年度の調査で上昇し、19 kg 前半で推移している。また、男児と女児との差は、約 0.5 kg 程度で推移している (図 3)。今回の調査でも、その差は 0.4 kg であった (表 7)。

年齢区分間の比較では、年齢区分 A と年齢区分 B との差は、男児が 0.9 kg、女児が 1.0 kg であった (表 7)。男児と女児の変化の割合はほぼ同じであった (図 4)。

(3) カウプ指数

ア 調査結果

表 8 カウプ指数の調査結果

性別	年齢 項目	年齢区分A (5歳0か月～5歳11か月)					年齢区分B (6歳0か月～6歳11か月)					全体		
		平均	標準 偏差	変動 係数	最高値	最低値	平均	標準 偏差	変動 係数	最高値	最低値	平均	標準 偏差	変動 係数
男 児		15.5	1.7	11.1	26.5	12.3	15.3	1.5	9.8	24.8	12.3	15.4	1.6	10.3
女 児		15.2	1.4	9.3	23.6	12.1	15.3	1.5	10.0	22.7	12.3	15.3	1.5	9.7

《カウプ指数》

カウプ指数とは、乳幼児 (3 か月～5 歳) の発育状態の程度を表す指数である。肥満・痩身度の指標であり、一般にボディマス指数 (BMI) と呼ばれる指数と同じである。

$$\text{カウプ指数} = [\text{体重 (g)} / \{\text{身長 (cm)}\}^2] \times 10$$

満 5 歳児の幼児の場合、カウプ指数が 14.5 以上 16.5 未満であれば、発育状態は「標準」であり、14.5 未満では「痩せぎみ」、16.5 以上では「太りぎみ」等と判定する。

イ カウプ指数の傾向分析

今回の調査の全体平均値については、男児が 15.4、女児が 15.3 であったため、発育状態は男女共に「標準」である (表 8)。

年齢区分間の比較では、年齢区分 A と年齢区分 B との差は、男児が 0.2、女児が 0.1 であった (表 8)。これらのことから、男女共に年齢による発育状態の差はないと言える。

(4) 25m走

ア 調査結果

表 9 25m走の調査結果

性別	年齢 項目	年齢区分A (5歳0か月～5歳11か月)					年齢区分B (6歳0か月～6歳11か月)					全体		
		平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数
男児		6.7	1.4	21.1	5.0	17.3	6.3	1.1	16.7	4.4	16.3	6.5	1.2	19.1
女児		6.6	1.0	15.4	4.7	15.7	6.4	0.9	13.4	4.8	14.7	6.5	0.9	14.2

イ 度数分布

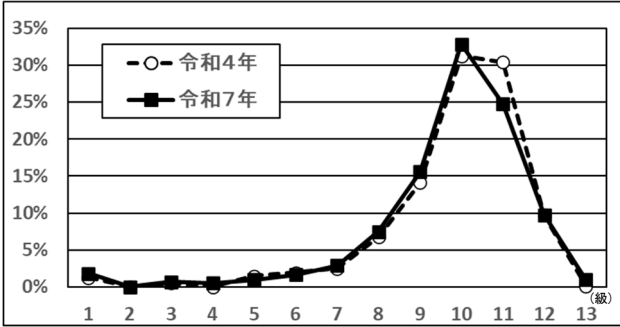


図 5 25m走の度数分布 (前回比較) (男児)

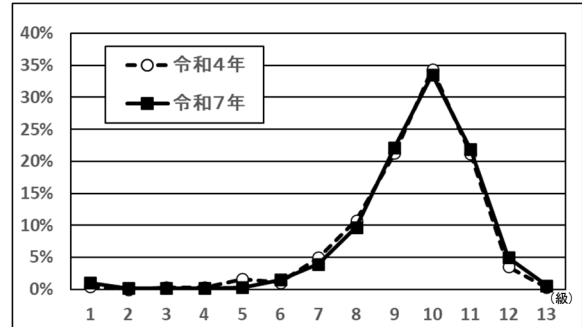


図 6 25m走の度数分布 (前回比較) (女児)

《25m 走 級設定》 (単位: 秒)

1級 10.6～	2級 10.1～10.5 (代表値 10.3)	3級 9.6～10.0 (代表値 9.8)
4級 9.1～9.5 (代表値 9.3)	5級 8.6～9.0 (代表値 8.8)	6級 8.1～8.5 (代表値 8.3)
7級 7.6～8.0 (代表値 7.8)	8級 7.1～7.5 (代表値 7.3)	9級 6.6～7.0 (代表値 6.8)
10級 6.1～6.5 (代表値 6.3)	11級 5.6～6.0 (代表値 5.8)	12級 5.1～5.5 (代表値 5.3)
13級 ~5.0		

男児は、11級の割合が減り、10級の割合が増えた。女児は、前回の調査の度数分布とほぼ同じ形状を示し、男女共に、最頻値が平均値の属する10級となっている(図5及び図6)。

ウ 全体平均値の推移

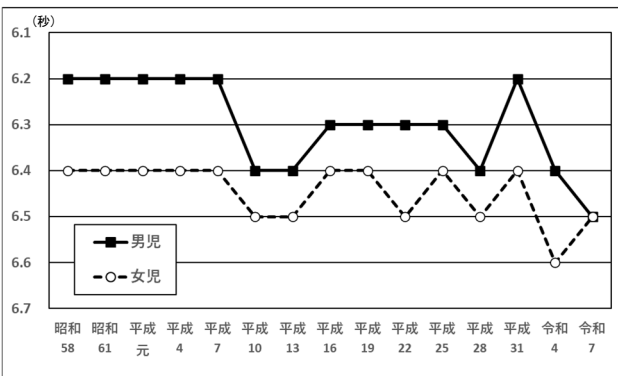


図 7 25m走の全体平均値の推移

エ 指数変化の推移

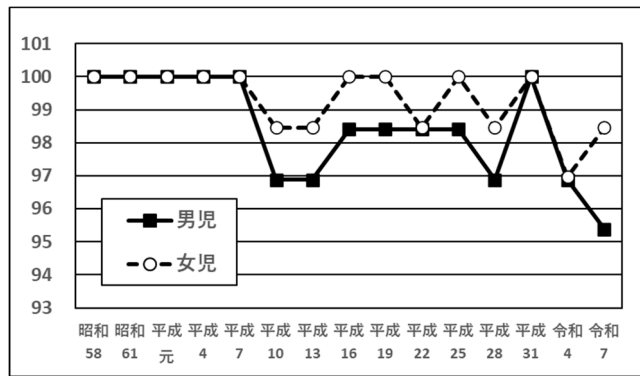


図 8 25m走の指数変化の推移

全体平均値は、女児は前回の調査が過去最も遅い数値だったが、今回の調査で上昇した。男児は今回の調査結果の数値が、過去の調査結果の中で最も遅い数値となり、男女共に同じ数値となった(図7)。

第1回調査(昭和55年度)の結果を100とした指数変化では、昭和58年度から平成7年度まで男女共に変化はなかったが、平成10年度から男女共に低下した(図8)。今回の調査では、男児は前回調査の96.9から95.4に低下した。女児は前回調査の97.0から98.5に上昇した。

オ 年齢区分間・男女間の比較

年齢区分間の差は、男児が約 0.4 秒、女児が約 0.2 秒であった（表 9）。

変化の割合は男児の方が大きかった（図 9）。

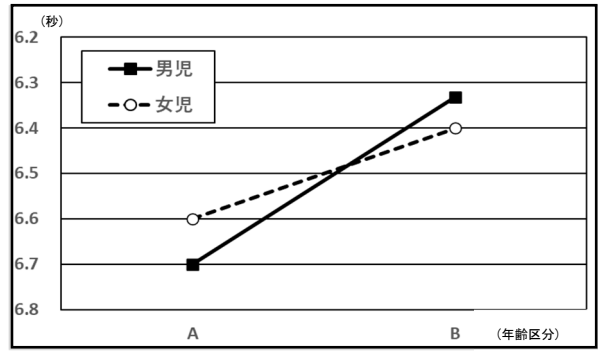


図 9 25m走の年齢区分間・男女間比較 (今回)

(5) 立ち幅跳び

ア 調査結果

表 10 立ち幅跳びの調査結果

性別	年齢	年齢区分A (5歳0か月～5歳11か月)					年齢区分B (6歳0か月～6歳11か月)					全体		
		平均 (cm)	標準偏差	変動係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	平均 (cm)	標準偏差	変動係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	平均 (cm)	標準偏差	変動係数
男児		99.1	23.1	23.3	168.0	10.0	107.9	21.3	19.7	161.0	22.0	104.0	22.5	21.7
女児		93.2	18.6	20.0	134.0	23.0	101.8	19.0	18.6	170.0	20.0	98.5	19.2	19.5

イ 度数分布

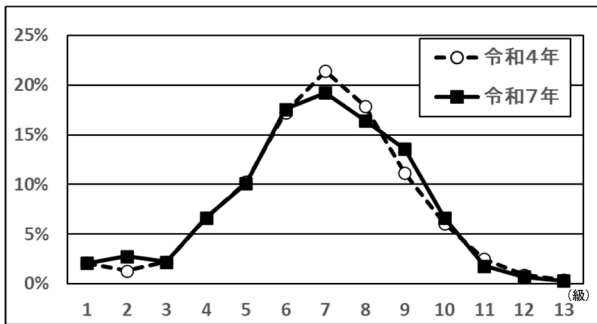


図 10 立ち幅跳びの度数分布 (前回比較) (男児)

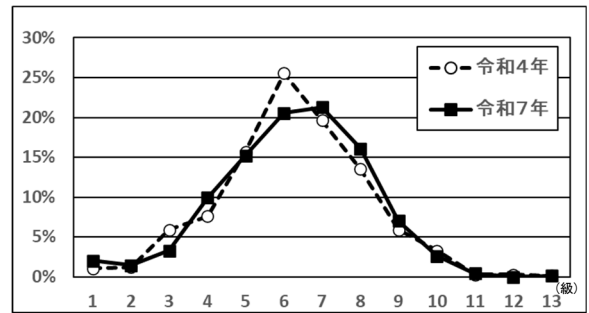


図 11 立ち幅跳びの度数分布 (前回比較) (女児)

《立ち幅跳び 級設定》(単位: cm)

1級	0～50 (代表値 25)	2級	51～60 (代表値 55)	3級	61～70 (代表値 65)
4級	71～80 (代表値 75)	5級	81～90 (代表値 85)	6級	91～100 (代表値 95)
7級	101～110 (代表値 105)	8級	111～120 (代表値 115)	9級	121～130 (代表値 125)
10級	131～140 (代表値 135)	11級	141～150 (代表値 145)	12級	151～160 (代表値 155)
13級	161～				

男児は、9級の割合が増加し、7級及び8級の割合が減少した（図 10）。女児は、8級の割合が増加するとともに、最頻値が属する級が6級から7級に移行した（図 11）。

ウ 全体平均値の推移

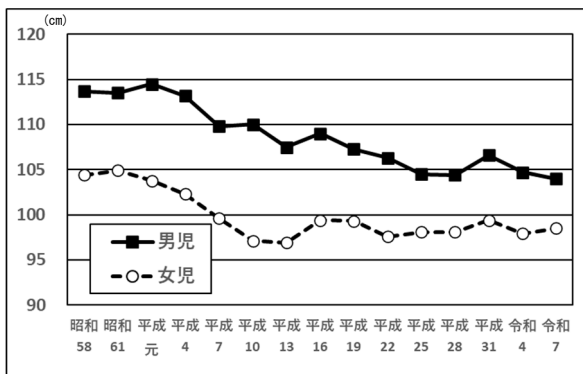


図 12 立ち幅跳びの全体平均値の推移

エ 指数変化の推移

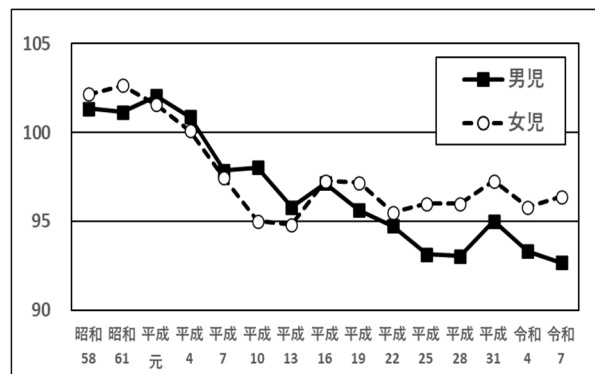


図 13 立ち幅跳びの指数変化の推移

全体平均値は、男女共に第 1 回調査以降低下傾向にあるものの、女兒は平成 16 年度以降、数値はほぼ横ばいである（図 12）。男女共に前回の調査では低下したが、今回の調査では女兒は上昇した。

指数変化の推移は、今回の調査では、男児が 92.7、女兒が 96.4 であり、男児は過去の調査結果の中で最も低い数値となった（図 13）。

オ 年齢区分間・男女間の比較

年齢区分間の差は、男児が約 8.8 cm、女兒が約 8.6 cm であった（表 10）。

男児と女兒の変化の割合はほぼ同じであった（図 14）。

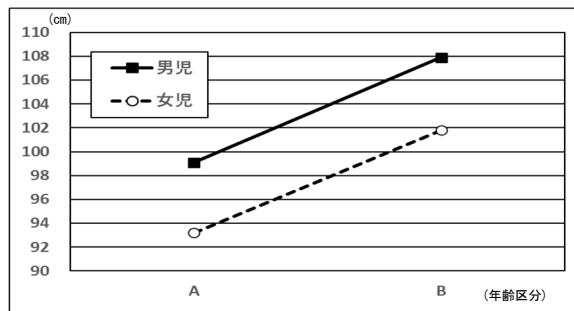


図 14 立ち幅跳びの年齢区分間・男女間の比較（今回）

(6) ソフトボール投げ

ア 調査結果

表 11 ソフトボール投げの調査結果

性別	年齢区分	年齢区分A (5歳0か月～5歳11か月)					年齢区分B (6歳0か月～6歳11か月)					全体		
		平均 (m)	標準偏差	変動係数	最高値 (m)	最低値 (m)	平均 (m)	標準偏差	変動係数	最高値 (m)	最低値 (m)	平均 (m)	標準偏差	変動係数
男児		5.1	2.5	48.9	16.0	0.5	6.0	2.7	44.7	17.0	0.5	5.6	2.6	46.9
女兒		3.8	1.4	37.1	8.0	0.5	4.4	1.5	35.1	10.0	0.5	4.1	1.5	36.6

イ 度数分布

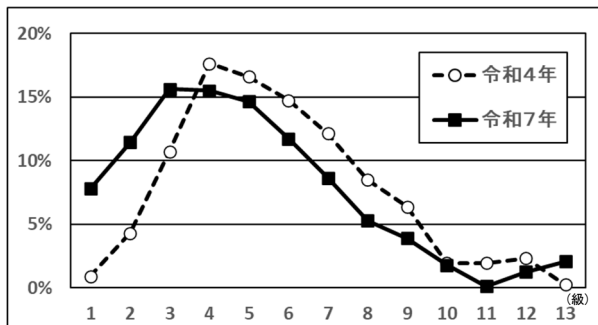


図 15 ソフトボール投げの度数分布（前回比較）（男児）

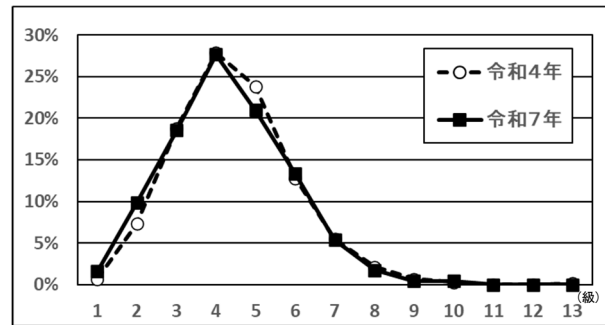


図 16 ソフトボール投げの度数分布（前回比較）（女兒）

《ソフトボール投げ 級設定》（単位：m）

1級	0 ～ 1.0 (代表値 0.5)	2級	1.1～ 2.0 (代表値 1.5)	3級	2.1～ 3.0 (代表値 2.5)
4級	3.1～ 4.0 (代表値 3.5)	5級	4.1～ 5.0 (代表値 4.5)	6級	5.1～ 6.0 (代表値 5.5)
7級	6.1～ 7.0 (代表値 6.5)	8級	7.1～ 8.0 (代表値 7.5)	9級	8.1～ 9.0 (代表値 8.5)
10級	9.1～10.0 (代表値 9.5)	11級	10.1～11.0 (代表値10.5)	12級	11.1～12.0 (代表値11.5)
13級	12.1～13.0 (代表値12.5)				

男女共に、最頻値は平均値を含む級よりも低い級に含まれている（図 15 及び図 16）。

また、男女共に標準偏差の値に比べ、変動係数の値が非常に大きくなっている（表 11）。そのため、この種目では、多くの幼児が平均値に近い数値結果である一方で、一部個人差が大きい種目になっていると言える。

ウ 全体平均値の推移

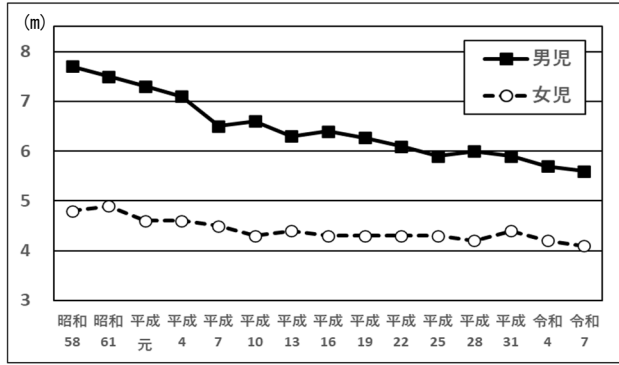


図 17 ソフトボール投げの全体平均値の推移

エ 指数変化の推移

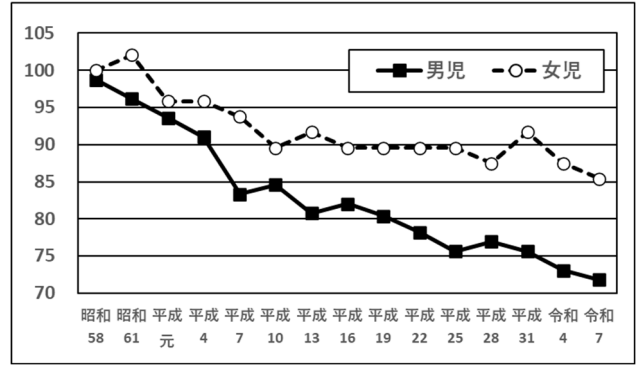


図 18 ソフトボール投げの指数変化の推移

全体平均値は、第 1 回調査以降、男児は低下傾向、女児は 4 m から 5 m までの範囲内で推移している。男女共に、今回の調査結果が過去の調査結果の数値の中で最も低い数値となった（図 17）。

また、指数変化の推移から男女共に年々低下傾向にあることが分かる（図 18）。今回、男児の数値が 71.8 で、女児の数値が 85.4 と男女共に過去の調査結果の数値の中で最も低い数値となった。

オ 年齢区分間・男女間の比較

年齢区分間の差は、今回の調査では、男児が約 0.9m、女児が約 0.6m だった（表 11）。

前回同様、年齢が上がるにつれて性差による数値の開きが大きくなるとともに、変化の割合は男児の方が女児よりも大きくなった（図 19）。

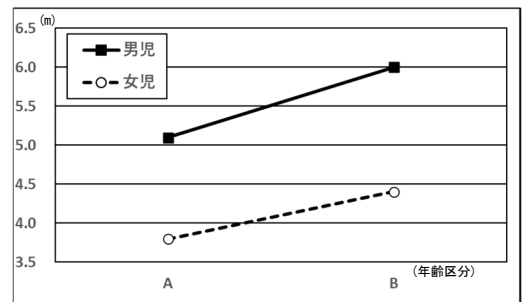


図 19 年齢区分間・男女間の比較（今回）

(7) 体支持持続時間

ア 調査結果

表 12 体支持持続時間の調査結果

性別	年齢	年齢区分A（5歳0か月～5歳11か月）					年齢区分B（6歳0か月～6歳11か月）					全体		
		平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数
男児		34.8	30.7	88.2	180.0	1.0	39.2	31.1	79.3	180.0	1.0	37.3	30.9	82.9
女児		33.1	26.9	81.4	180.0	1.0	40.0	32.5	81.2	180.0	1.0	37.3	30.6	82.0

イ 度数分布

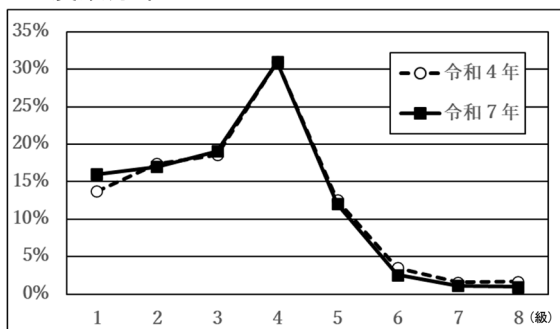


図 20 体支持持続時間の度数分布（前回比較）（男児）

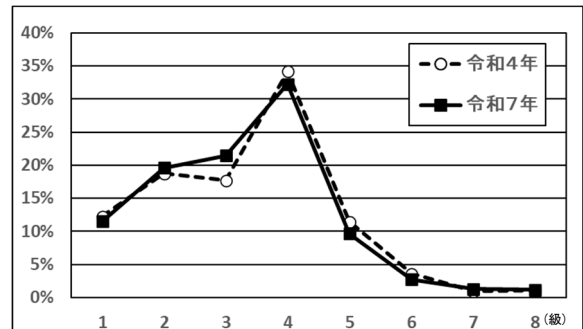


図 21 体支持持続時間の度数分布（前回比較）（女児）

《体支持持続時間 級設定》（単位：秒）

1 級	0～ 10（代表値 5）	2 級	11～ 20（代表値 15）	3 級	21～ 30（代表値 25）
4 級	31～ 60（代表値 45）	5 級	61～ 90（代表値 75）	6 級	91～120（代表値 105）
7 級	121～150（代表値 135）	8 級	151～180（代表値 165）		

男児は、1 級の割合は増加したものの、前回とほぼ同様の分布となった（図 20）。女児は、平均値が属する 4 級の割合が、やや低下し、3 級の割合が増加した（図 21）。

また、標準偏差、変動係数の値がともに大きくなっていることから、平均値からの散らばりが大きくなっている（表 12）。「ソフトボール投げ」と同様に、個人差が大きい種目であると言える。

ウ 全体平均値の推移

第 1 回調査以降、男女共に低下傾向であり、今回の調査結果は、過去の調査結果の中で男女共に最も低い数値結果となった（図 22）。

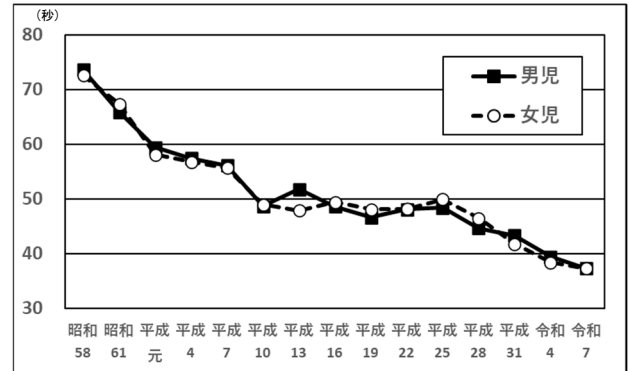


図 22 体支持持続時間の全体平均値の推移

エ 指数変化の推移

男児が 46.1、女児が 46.8 となり、第 1 回調査結果と比べ半分以下の数値結果となった（図 23）。

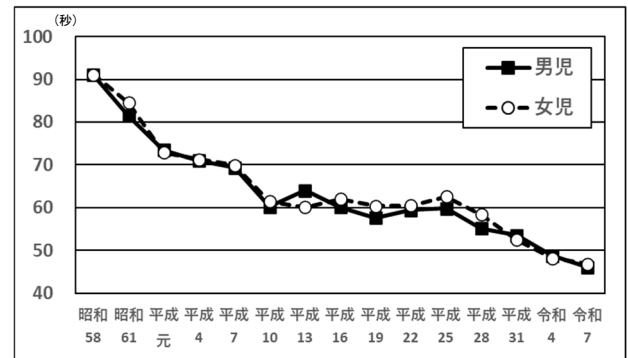


図 23 体支持持続時間の指数変化の推移

オ 年齢区分間・男女間の比較

年齢区分間の差は、今回の調査では、男児が約 4.4 秒、女児が約 6.9 秒だった（表 12）。

また、年齢が上がるにつれて男児と女児の数値の差がなくなり、年齢区分 B において男女の数値が逆転する傾向は、令和 4 年度においても同様の傾向が見られた（図 24）。

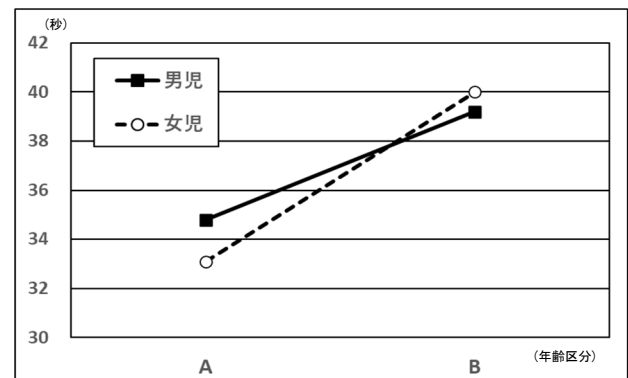


図 24 体支持持続時間の年齢区分間・男女間の比較 (今回)

(8) 両足連続跳び越し

ア 調査結果

表 13 両足連続跳び越しの調査結果

性別	項目	年齢区分A (5歳0か月～5歳11か月)					年齢区分B (6歳0か月～6歳11か月)					全体		
		平均 (秒)	標準偏差	変動係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平均 (秒)	標準偏差	変動係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平均 (秒)	標準偏差	変動係数
男児		6.1	3.6	59.4	3.7	21.2	5.6	2.0	35.8	3.4	20.9	5.9	2.8	48.6
女児		6.1	2.3	38.5	3.7	25.0	5.6	1.8	31.5	3.5	26.6	5.8	2.0	34.7

イ 度数分布

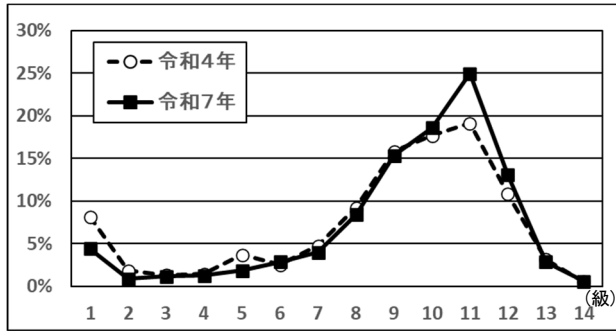


図 25 両足連続跳び越しの度数分布(前回比較)(男児)

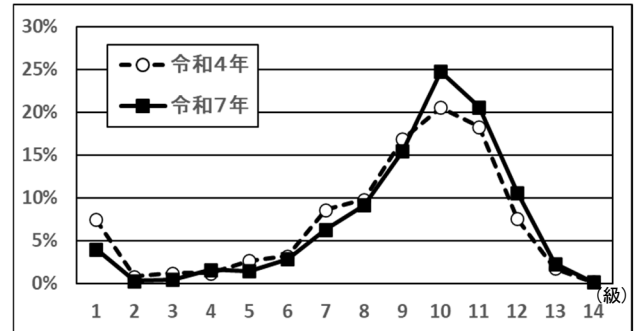


図 26 両足連続跳び越しの度数分布(前回比較)(女児)

《両足連続跳び越し 級設定》(単位：秒)

1級	9.6～	2級	9.1～9.5 (代表値 9.3)	3級	8.6～ 9.0 (代表値 8.8)
4級	8.1～8.5 (代表値 8.3)	5級	7.6～8.0 (代表値 7.8)	6級	7.1～ 7.5 (代表値 7.3)
7級	6.6～7.0 (代表値 6.8)	8級	6.1～6.5 (代表値 6.3)	9級	5.6～ 6.0 (代表値 5.8)
10級	5.1～5.5 (代表値 5.3)	11級	4.6～5.0 (代表値 4.8)	12級	4.1～ 4.5 (代表値 4.3)
13級	3.6～4.0 (代表値 3.8)	14級	～3.5		

男女共に、10 級、11 級及び 12 級の割合が増加し、1 級の割合が低下している (図 25 及び図 26)。また、変動係数の値が大きくなっていることから、「ソフトボール投げ」及び「体支持持続時間」と同様に個人差の大きい種目であることが言える (表 13)。

ウ 全体平均値の推移

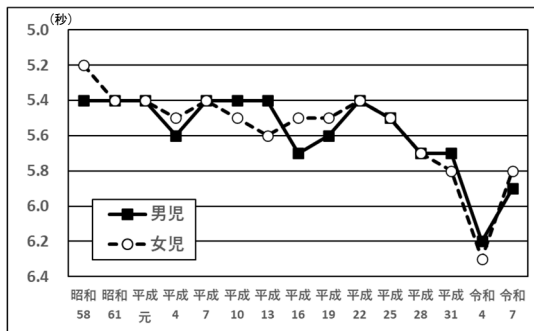


図 27 両足連続跳び越しの全体平均値の推移

エ 指数変化の推移

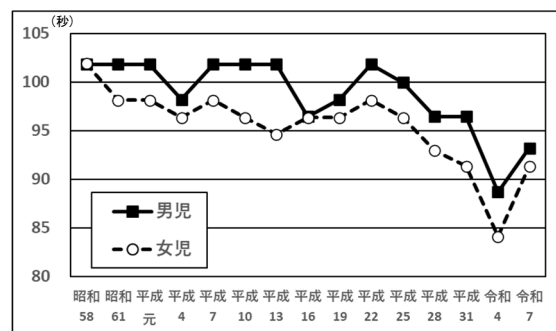


図 28 両足連続跳び越しの指数変化の推移

全体平均は、前回の調査では大幅に低下し、過去の調査結果の中で最も低い数値だったが、今回の調査では男女共に上昇した (図 27)。

また、指数変化も、前回の調査結果が過去の調査で最も低かったのに対し、今回の調査では男女共に前々回並みまで上昇した (図 28)。

オ 年齢区分間・男女間の比較

今回の調査では、区分 A の男女の数値が同じで、区分 B の男女の数値も同じだった（表 13）。そのため、年齢区分の差も、今回の調査では、男女共に約 0.5 秒で、変化の割合も同じだった（図 29）。

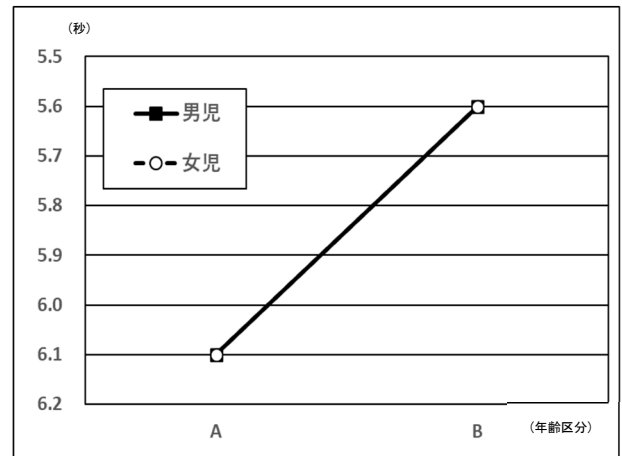


図 29 両足連続跳び越しの年齢区分間・男女間の比較 (今回)

第 4 幼児の遊びに関する調査の結果及び分析

運動能力調査と併せて、幼児が楽しんで体を動かしている遊びやその遊びに対して各園が行っている取組、幼児の日常生活における動作に関する課題及び運動能力調査の数値結果から見られる幼児の動きに関する傾向等を調べるために、「幼児の遊びに関する調査」を実施し、分析した。

1 幼児の遊びに関する調査の結果

(1) 運動能力調査の結果に基づく調査対象幼児

この調査において、「運動能力調査の数値が上位の幼児」とは、運動能力調査 5 種目全ての数値結果が、各園における平均値よりも上回っている幼児のことである。「運動能力調査の数値が下位の幼児」とは、運動能力調査の結果を基に、各園においてクラス担任等が調査対象として選んだ幼児のことである。発達の段階から、幼児は周囲の状況に影響を受けやすく、運動能力に課題のない幼児も、調査当日に心理的に負荷が掛かると正確に数値が測定できないこともある。そのため、運動能力調査の結果だけでなく、日頃の幼児の様子を把握しているクラス担任等に調査対象の決定を依頼している。

各調査対象幼児の数は、以下のとおりである。

	合計数	全体における割合
運動能力調査の数値が上位の幼児	87 人 (男児 46 人、女児 41 人)	5.8%
運動能力調査の数値が下位の幼児	112 人 (男児 56 人、女児 56 人)	7.5%

(2) 運動能力の数値結果別の好きな遊びの比較分析

運動能力の数値結果の違いによって、好きな遊びの違いが現れるのかを調べ、それぞれが好きな遊びについて、割合が高い遊びの上位 10 点について表した（表 14）。

運動能力の数値結果に関わらず「鬼ごっこ」は第 1 位で共通しているが、運動能力調査の数値が上位の幼児は、「リレー」及び「縄跳び」が、下位の幼児は、「砂場」及び「虫探し」が第 2 位及び第 3 位という結果になった。

このことから、上位の幼児は動的な遊びを好み、下位の幼児は静的な遊びを好む傾向があることが分かった。

表 14 運動能力の数値結果が上位と下位の幼児の好きな遊びの比較 (%)

運動能力の数値が上位の幼児	運動能力の数値が下位の幼児
鬼ごっこ	鬼ごっこ
15.9	17.5
リレー	砂場
9.5	7.8
縄跳び	虫探し
8.2	7.4
ドッジボール	リレー
7.3	5.4
鉄棒	縄跳び
6.9	5.1
雲梯	鉄棒
6.0	4.3
サッカー	ドッジボール
3.0	3.5
砂場	雲梯
3.0	2.7
登り棒	ボール遊び
3.0	1.9
虫探し	追いかっこ
2.6	1.9

(3) 運動能力調査結果の数値別の動きの出現傾向比較

この調査では、前回の調査に際し、当時の調査委員会が策定した「楽しんで体を動かしている遊びの中に含まれる動き」を 30 種類に分類したもの（図 30）を活用して、運動能力の数値別に調査した。

《「動き」について》  
 本調査における動きは、幼児が自ら選んだ遊びをしている様子を観察・調査した結果から、「平成 17 年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 I 幼少期に身に付けておくべき基本運動（基礎的動き）に関する研究」及びNHK「からだであそぼ」において使用された基本動作のそれぞれを参考として作成した。

1 たつ・しゃがむ	2 おきる・ねる	3 まわる	4 ころがる
5 くむ・つまかさなる	6 わたる	7 ぶらさがる	8 のぼる
9 おりる	10 とびおりる	11 ほう	12 あるく
13 はしる	14 とぶ・はねる	15 かわす	16 くぐる
17 もつ・はこぶ	18 おす	19 ひく	20 つかむ
21 なげる	22 うける・うけとめる	23 わたす	24 ふる
25 まわす	26 つむ・つまあげる	27 ころがす	28 ほる・けずる
29 うつ・たたく	30 ける		

※ 動きの要素については、「はしる」「なげる」等のよく見られることが予想されるものを抽出し、「およく」「もぐる」等の特定の季節に影響される動作は省いている。

図 30 幼児が楽しんで体を動かしている遊びの中に含まれる「動き」の分類

運動能力の数値が上位の幼児について、「動き」の出現頻度を前回の調査における運動能力の数値が上位の幼児と比較するために、今回の調査における出現傾向が高い順に並べてグラフにまとめた。全体的に、運動能力の数値が上位の幼児に関して「動き」の出現傾向に大きな変化は見られなかった（図 31）。

今回の調査では、「1 たつ・しゃがむ」が最も出現頻度が高かった。また上位 10 項目（「たつ・しゃがむ」から「つかむ」まで）の中で「1 たつ・しゃがむ」、「12 あるく」、「15 かわす」、「9 おりる」、「7 ぶらさがる」及び「8 のぼる」が前回に比べ上昇している。一方で、「13 はしる」、「14 とぶ・はねる」、「10 とびおりる」及び「20 つかむ」が前回に比べ低下している。

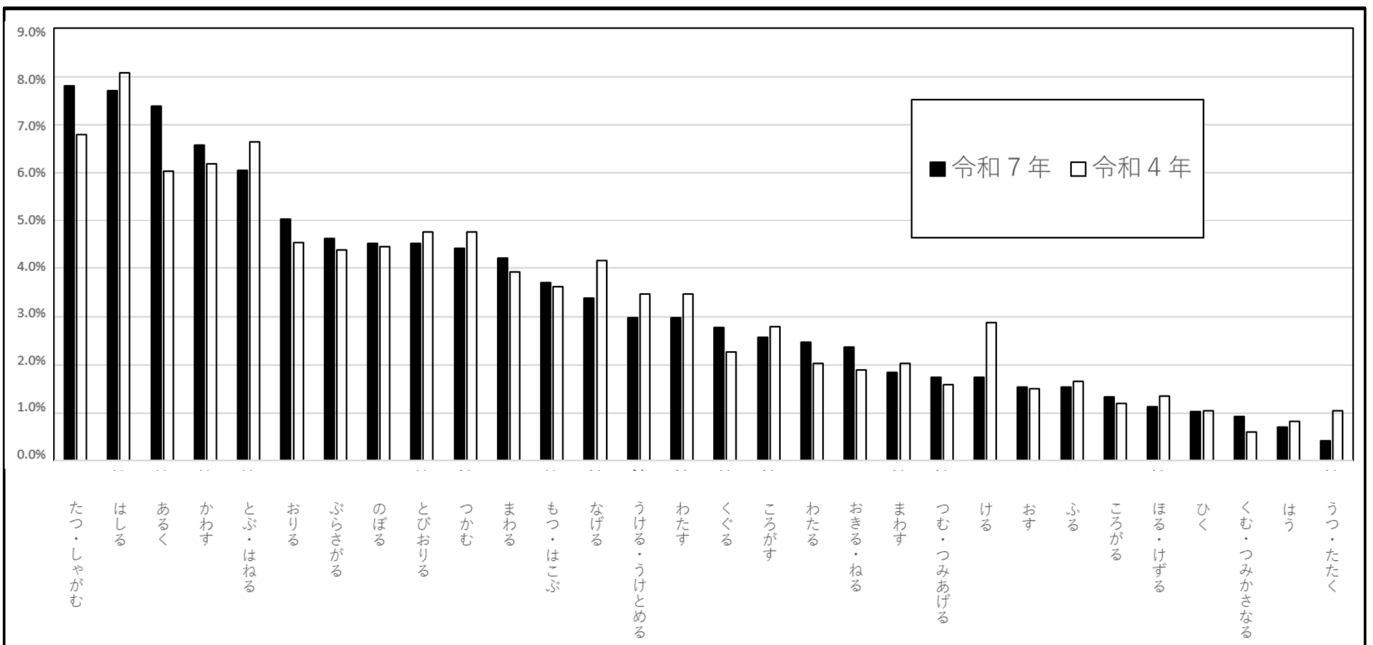


図 31 運動能力の数値が上位の幼児が楽しんで体を動かしている遊びに含まれる「動き」の出現傾向の前回比較

運動能力の数値が上位と下位の幼児についても「楽しんで体を動かしている遊びに含まれる動き」について比較を行うために、それぞれの出現傾向を、運動能力の数値が上位の幼児の出現傾向が高い順に並べてグラフにまとめた (図 32)。

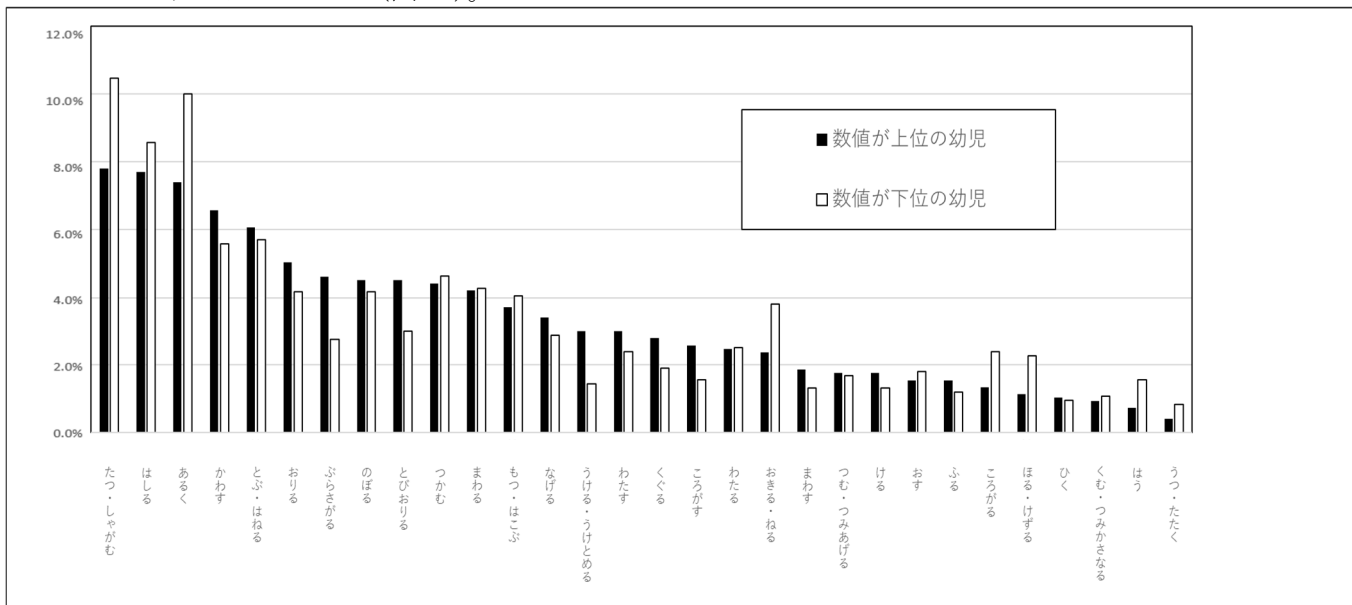


図 32 運動能力の数値が上位と下位の幼児が「楽しんで体を動かしている遊びに含まれる動き」の出現傾向の比較

運動能力の数値が下位の幼児の「動き」の出現傾向を上位の幼児と比較すると、上位の幼児で出現傾向が高い動きは下位の幼児も高く、上位の幼児で出現傾向が低い動きは下位の幼児も低くなっている (図 32)。一方で、運動能力の数値が下位の幼児は、「1 たつ・しゃがむ」、「12 あるく」及び「13 はしる」の 3 点の動きだけで全体の約 3 割を占めており、運動能力の数値が上位の幼児に比べて動きに偏りがあると言える。このことから、運動能力の数値が上位の幼児は下位の幼児に比べ、動きに偏りがなく、前述の「好きな遊びの比較分析」と関連付けて考察すると、多様な動きを経験していることが、動的な遊びを好むことにもつながっていると考えられる。

(4) 調査対象幼児の日常生活における動作の傾向

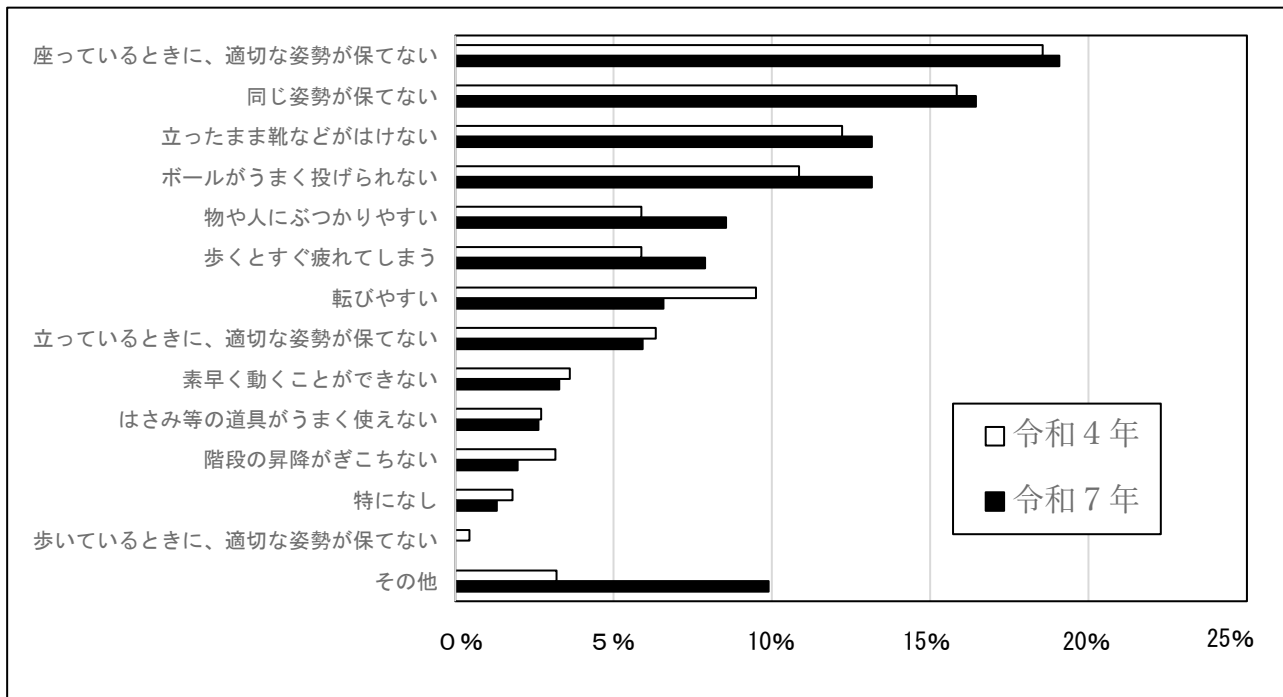


図 33 幼児の日常生活に必要な動作や身のこなしについての教諭の実感についての前回比較

幼児の日常生活に必要な身のこなし等について、各園で教諭が感じていることを 3 点以内で回答を求め、前回の調査の結果と比較するために、今回の調査結果で割合が高い順に並べてグラフにまとめた(図 33)。

前回調査では、「座っているときに、適切な姿勢が保てない(18.6%)」、「同じ姿勢が保てない(15.8%)」、「ボールがうまく投げられない(10.9%)」及び「立ったまま靴などがはけない(12.2%)」の上位 4 項目で約 58%を占めていたが、今回の調査でも同じ 4 項目で約 62%を占めており、どの項目においても、前回の調査を上回っている。また、「物や人にぶつかりやすい」は最も上昇率が高く、「転びやすい」以降は、前回の調査を下回っているが、「その他」の割合は 7ポイント上昇している。「その他」の記述式の回答では、「(登降園時に) 荷物(リュックサックや手提げ袋)を自分で持たず、保護者に持ってもらっている」、「すぐに寝転がる」及び「(ジャンプする際)つま先で跳べず、足の裏が地面に付いている」等の前回の調査ではなかった記述が見られた。前回の調査よりも多岐にわたる課題を教諭が感じており、体力の低下や、自分自身の体を思いどおりに動かすセルフコントロールの低下が懸念される。

**(5) 調査対象幼児の日常生活における動作の傾向が現れる原因**

幼児の日常生活に必要な身のこなし等についての調査結果において、その動作の傾向が現れる原因を教諭はどのように考えているのかを記述式で回答を求め、項目ごとに整理してグラフにまとめた(図 34)。

主な原因として、「体幹が弱い」、「運動時間の減少」、「集中力・持続力の低下」及び「家庭での体を動かすことの減少」の 4 項目で、全体の約 8 割を占めていることが分かった。

このことを踏まえ、各園で改善を目的とした取組を継続的に行っていくことが必要でありそのような取組が運動能力調査の数値結果の変化にもつながっていくと考える。

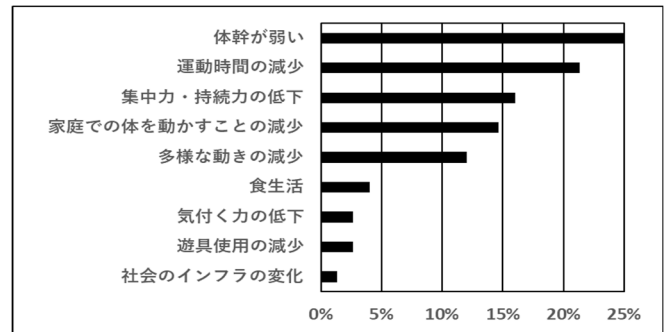


図 34 幼児の日常生活に必要な身のこなしについて教諭が考える原因

**(6) 日常生活における動作の傾向に対する各園の取組内容**

幼児の遊びに関する調査において、日常生活における動作の傾向に対する各園の取組内容について、教諭が記述式で回答したものを表にまとめた(表 15)。

表 15 日常生活における動作の傾向に対する各園の取組内容

原因	各園での取組に関する記述内容
体幹が弱い	・コーディネーショントレーニングを保育に取り入れ、幼児自身も意識できるようにしている。 ・リズム遊びでは、片足をあげる等のバランスにつながる動きが経験できるものを選んでいく。
家庭での体を動かすことの減少	・外部講師を招へいし、親子で運動遊びをする機会を設け、多様な遊びの中で様々な身体の使い方ができるように、計画的に運動遊びを取り入れている。 ・土曜参観を利用して親子でふれあいつつ体を動かせる遊びの提供を行った。
運動時間の減少	・発達に応じて意図的・計画的に運動遊びを実施している。
集中力・持続力の低下	・短時間で取り組むことができ、達成感が感じられやすいゲームを学級で取り組み、日頃から集中力を高める工夫に取り組んでいる。

これら以外にも、各園では、様々な工夫を凝らすことで、幼児の日常生活における動作や身のこなしについての課題に対する改善策を講じていることが分かった。

## 2 保護者への情報発信や保護者参加型の活動

今回の調査では、保護者との連携状況を把握するために、次の (1) ～ (4) についても調査を行った。

### (1) 園児の運動に関する保護者への情報発信

園児の運動に関して保護者への情報発信の主な手段について、各園の教諭が選択式で回答したものをまとめた (図 35)。

保護者への情報発信の主な手段は、「保護者会や個人面談 (35.6%)」が最も高く、次いで「登園・降園時の集い (28.7%)」が高かった。この 2 項目で全体の約 6 割以上を占めている。一方で、「メール (3.0%)」及び「SNS (3.0%)」の 2 項目は全体の 1 割にも満たなかった。

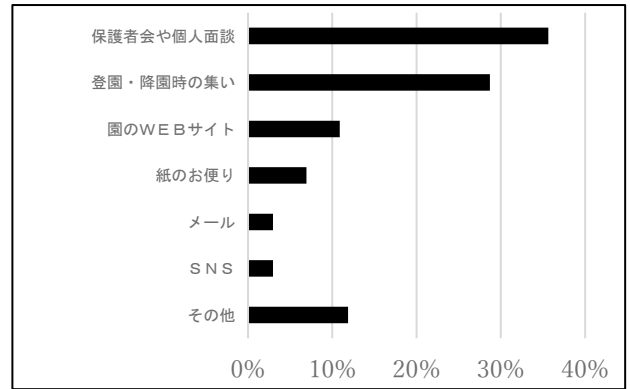


図 35 情報発信の主な手段

### (2) 保護者に対する発信の内容

保護者に対して運動に関するどのような情報を発信しているかについて、選択式で回答したものをまとめた (図 36)。

各園が発信している情報は、「自園での取組 (52.8%)」が最も高く、次いで「家庭で取り組んでほしい運動 (18.9%)」及び「園外で行われるイベントの情報 (13.2%)」の順となった。各園は、積極的に自園での取組を発信するとともに、家庭への要望も伝えながら、幼児の運動に関する理解・啓発を図っていることが分かる。

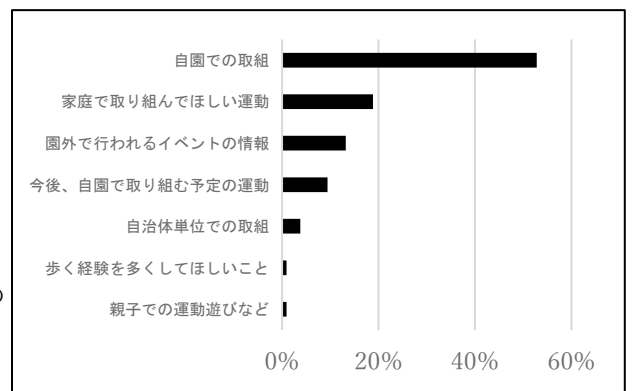


図 36 情報発信の内容

### (3) 保護者からの反応

園から発信する情報への保護者からの反応やフィードバックについて、各園の教諭が選択式で回答したものをまとめた (図 37)。

保護者からの情報への反応やフィードバックは、「時々ある (57.1%)」が最も高く、次いで「あまりない (33.9%)」が高かった。「あまりない (33.9%)」及び「ほとんどない (5.4%)」が全体の約 4 割を占めることから双方向のやり取りに課題があると考えられる。

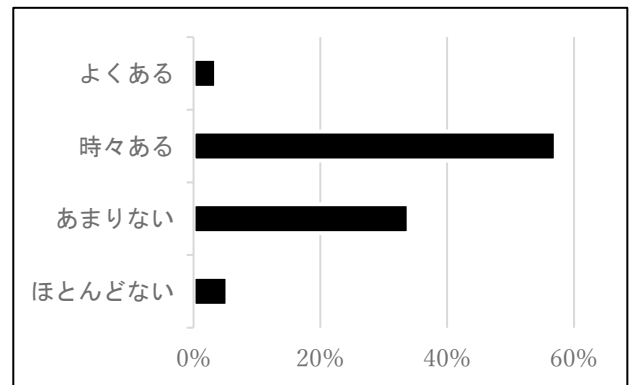


図 37 保護者からの反応

このことは、(1)「園児の運動に関する保護者への情報発信」で述べたとおり、園の ICT を活用した情報発信手段が全体の 1 割にも満たないことに関連付けられる。仕事や家事と子育てを両立している保護者にとって、限られた時間を有効活用することは重要である。「保護者会や個人面談」及び「登園・降園時の集い」等のリアルなコミュニケーションも大切にしながら、仕事や家事の合間の隙間時間に、園からの情報に簡単にアクセスし、反応やコメントができるデジタルを介したやり取りも今後活用し、保護者が子供の運動について関心を高め、家庭での取組も充実させる必要がある。

#### (4) 保護者参加型行事の内容

主な保護者参加型行事の内容について、各園の教諭が選択式で回答したものをまとめた(図38)。

保護者参加型行事の内容については、「保育参観(25.2%)」が最も高く、次いで「運動会(24.8%)」及び「親子遠足(21.8%)」が高かった。この3項目で約7割を占めている。保育参観に次いで、保護者参加型の運動会の実施が多い理由としては、子供と共に参加し、体験することを通して、日頃の園での運動に関する取組を保護者が知ることの重要性を園が感じ、意図的に設定していることが考えられる。

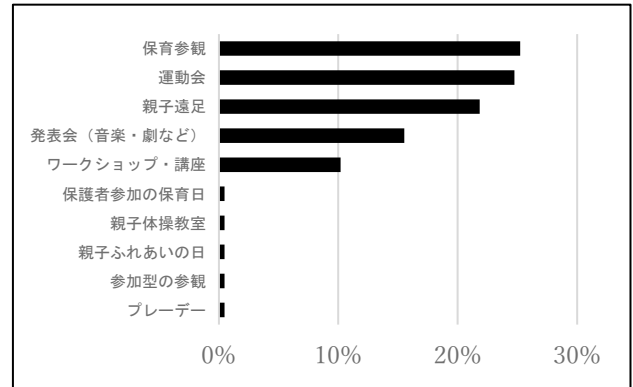


図38 保護者参加型行事の内容

### 第5 調査のまとめ及び今後に向けて

#### 1 調査のまとめ

今回、調査した「幼児の運動能力」、「幼児の遊び」及び「保護者への情報発信等」について、調査結果及び傾向等について下にまとめた。

##### (1) 幼児の運動能力

- ・「25m走」の全体平均値は、男児は今回の結果の数値が、過去の結果の中で最も遅い数値となった。女児は前回の調査が過去最も遅い数値だったが、今回の調査で上昇し、男子と同じ数値となった。
- ・「立ち幅跳び」は、男女共に前回の調査では低下したが、女児は今回の調査で上昇した。
- ・「ソフトボール投げ」は、男児は低下傾向、女児はほぼ横ばいで推移しているが、男女共に過去の結果の中で最も低かった。
- ・「体支持持続時間」は、男女共に低下傾向であるが、年齢が上がるにつれて男児と女児の数値の差がなくなり、年齢区分Bにおいて男女の数値が逆転する傾向は、前回の調査と同様の傾向であった。
- ・「両足連続跳び越し」は、男女共に、前々回の調査程度まで上昇した。

##### (2) 幼児の遊び

- ・「幼児の好きな遊び」は、運動能力の数値結果に関わらず第1位は同じだが、運動能力が上位の幼児は動的な遊びを好み、下位の幼児は静的な遊びを好む傾向が見られた。
- ・「楽しんで体を動かしている遊びの中に含まれる動き」では、運動能力の数値が上位の幼児は下位の幼児に比べ、多様な動きを経験していることが示唆された。

##### (3) 保護者への情報発信等

- ・運動に関する保護者への情報発信の主な手段は「保護者会や個人面談」が最も多く、また、発信している情報は、「自園での取組」に関する内容が最も多かった。それに対する保護者からの反応やフィードバックは「時々ある」が最も多かったが、双方向のやり取りに課題があることが示唆された。
- ・保護者参観型行事の内容では、「保育参観」が最も多かったが、「運動会」が次いで多く、子供と共に参加し、体験することを通して、日頃の園での運動に関する取組を保護者が知ることの重要性を園が感じ、意図的に設定していることが示唆された。

## 2 今後に向けて

### (1) 調査結果の総括

前回に引き続いて、調査の監修をいただいた、東京学芸大学教育実践創成講座（教職大学院）幼児教育サブプログラム 吉田伊津美教授に調査結果を総括していただいた。以下は吉田教授による考察である。

今回の運動能力調査結果の主な特徴として、以下のことが挙げられる。

- ・ ソフトボール投げは男女共に過去最低であった。
- ・ 両足連続跳び越しのみ男女共に上昇傾向が見られた。
- ・ 25m走については性差がなかった。

来年度、幼児の運動能力に関する全国調査が行われる予定であり、その結果を基に以下の内容について検討することが必要である。

- ・ 投能力の低下傾向が東京都の 5 歳児特有のものなのか、全国的な傾向なのかを見極める。
- ・ 運動発達は運動経験によるため、前回の調査以降、園や家庭での取組について各園で振り返ることが今後の取組の布石となることが考えられる。
- ・ 走跳投の 3 種目は男児が優位という性差が 4 歳から見られる種目である。特に年齢区分 A（5 歳 0 か月から 5 歳 11 か月まで）においては女児が男児を上回る傾向も見られ（図 9）、背景についての検討が必要であろう。

また、好きな遊び 10 位の運動能力上下群の比較では、運動能力に関わらず類似しているものがあつたが（表 14）、運動能力が上位の幼児の方が多様な動きを経験していた（図 32）。このことから同じ遊びでも動き方が異なっていることが考えられる。今後は、環境の構成や特に運動能力が下位の幼児に対する関わり方の工夫によって動きの経験に偏りがないよう意識することが求められる。さらに、日常生活において教諭が感じている点は（図 33）、上位の項目については前回とほぼ同じであった。

今後は現状把握にとどまらず、明らかにした課題にどう取り組むか具体的な方策を検討し改善を図ることが求められる。そして「運動習慣づくり」は重要であるが、運動を特別なものとして捉えるのではなく、生活全体の身体活動を豊かにし、生活の中の動きや活動量を注視していくことが肝要である。

### (2) 調査の更なる充実に向けて

今回の調査では、5 歳児の運動能力や日常生活における動作の傾向、各園の取組、保護者との情報共有の実態等、多面的な視点から現状を把握した。

本調査は、昭和 55 年から 45 年間という長期にわたって続いている調査である。今後も継続的な調査を通じて、質の高い幼児教育の推進に寄与できるよう、調査方法や内容の更なる工夫・改善を重ねていく。